

たけ だ あつ し 武 田 篤 志

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 200 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 人間科学専攻
学 位 論 文 題 目	都市空間と場所イメージの変容に関する社会学的研究 —「杜の都・仙台」を事例に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 吉 原 直 樹 教 授 高 城 和 義 教 授 正 村 俊 之 教 授 原 純 輔 助教授 永 井 彰

論 文 内 容 の 要 旨

問題設定——場所とイメージの社会学

今日、仙台は「杜の都」と呼ばれ、広く認知されている。仙台市も昭和48年（1973）に「杜の都の環境をつくる条例」を制定して以来、まちづくりの公式的なシンボルとしてこの名を掲げている。近年では観光宣伝、広告、テレビ、新聞、インターネット、等々で、仙台に関連するさまざまな局面において、この名を目に（耳に）することができる。「杜の都」の名は、定禅寺通りと青葉通りのケヤキ並木が織りなす中心市街の都市景観や青葉山一帯の自然林、広瀬川の風景、さらには都市の外周に展開する緑地帯など、都市と自然の調和を志向する視覚的イメージを巻き込みながら、仙台という場所と強く結びつけられている。それは、仙台の場所イメージの構成上きわめて重要な要素となっており、いわば象徴的な重心の一角を担っているといえよう。

もともとこの名称は、明治末期に観光案内書の記述として登場した。以後今日まで、「杜の都」の名は、仙台という特定の場所とほぼ百年にわたって関連づけられてきたことになる。しかし一方で、仙台は、戦災と復興事業、さらには高度成長期の都市再開発など、都市空間の大きな変容を経験している。戦前と戦後で、「杜の都」と仙台の結びつきには大きな相異がみられるのである。では、こうした場所と名称との結びつきはいかなるものなのか、またそこにはいかなる経験の地層が交差しているのだろうか。本論の探求は、こうした問いから出発している。

本論は、「杜の都」と仙台との結びつきを考察の対象とするが、それをいかなる対象として設定するか

という問題が重要となるだろう。これまで「杜の都」をめぐるのは、藩政時代の樹々の生い茂る町の風景に遡及する由来の語りがあろう。緑化政策やまちづくりの問題のなかに位置づけて捉える立場など、しばしば物理的な環境との関連から語られることが多かった。しかし、「杜の都」の呼称が登場した契機に注目してみると、そこには明治以降の近代的な経験が深く関与しているし、また、緑化との関連は戦後になってから比較的新しく構築されたものである。そこで本論では、「杜の都」を従来とは異なる視点から対象化しようと思う。すなわち、場所に関する言説としての「杜の都」というものである。この「杜の都」という名称が登場して現在にいたるまで、ほぼ百年の時間が経過している。言い換えれば、このことは、「杜の都」が、仙台の都市風景との対応のみならず、仙台をこの名で呼び習わす言説の営みにも成立の場をもっていたということを示している。実際、今日の仙台では、「杜の都」という呼称がさまざまな局面で使用されており、この名を用いる人々のさまざまな意識が、言説を介して交差しているのである。

ここで問題となるのが、そうした言説が関説対象としているのは、仙台という場所のイメージ（あるいは表象）であるという点である。この場合、場所イメージとは単なる地理的反映ではない。それは、仙台を「杜の都」と呼び習わしてきたこと、その百年にわたる営みのなかで運用され、変容を遂げてきたものである。本論は、こうした局面に照準しながら場所イメージを考察していく。

ところで、こうした場所とイメージというテーマは、現在の社会学においても焦眉のテーマであると思われる。場所については、すでに1970年代ごろから現象学的な傾向をもった都市社会学や人文地理学の分野で問題とされてきた。そこでは「生きた世界」の一つの現象として場所が定義され、このような場所は、意味に満たされた人間的世界として理解されていた。しかし、一方で、そこでは意味論的に安定した空間と身体に基づく場所像が一面的に描かれる傾向があった。現在は、そうした場所概念が成立しにくい状況のなかで、場所の問題が新たに提起されているのである。すなわち、グローバル化／ローカル化と呼ばれる事態がそれである。例えば、都市社会学者のデヴィッド・ハーヴェイは、地球規模での資本の展開とモノ・人・情報の移動により、「空間的障壁が重要でなくなるにつれ、空間内における場所のヴァリエーションにたいして資本はより敏感になるとともに、資本を引きつけるように場所の差異をつくりだそうという誘因が高まる」というパラドクスを指摘している。こうした状況下での「場所」とは、ジョン・アーリが定義しているように、内部に閉じた構造ではなく、「多重チャンネルとして、つまり関連のあるネットワークとフローが集まり、合体し、接続し、分解する空間の集まり」として理解される。「場所は、一方の、非常に厚みのある共在的な相互作用を特徴とする近接性と、他方の、とめどなくフローする、実体的、ヴァーチャル的、イメージ的に距離を隔てて広がるウェブとネットワークとの間の、ある特定の連鎖」として捉えられるのである。

一方のイメージについても、現代社会は、メディア技術や情報通信の発達にともない、かつてないほどにイメージの領域を社会的な現実構成やシステム統合の契機として利用している。比較的に小規模な生活世界のリアリティから全体社会の統合的な認識にいたるまで、さまざまな局面においてイメージの領域が重要性を増してきているのである。もっとも、現代社会とイメージというテーマについては以前から数多くの論者が言及してきた。その多くは、社会における実体とイメージの二分法に立ち、両者の混乱や戯れについて論じるもの、さらには、イメージの支配や優越を訴えるといった批判的言説であり、それは、例えば、「幻影の時代」や「疑似イベント」、「スペクタクルの社会」、「シミュレーション」や「ハイパーリアル」、「シミュラクル」といった言葉とともに語られてきた。そこでは、イメージが、現実に対する虚構の側に位置づけられ、否定的な意味合いを与えられる傾向が強かったように思われる。確かに、シミュラクルや疑似イベントと呼ぶ現象は確認される。だが、こうした数々の批判

的な言説は、むしろイメージと社会との密接な関係を示唆するものと言えるだろう。まして今日では、電子メディアの発達により、イメージの流れはよりいっそう私たちの日常生活に深く浸透し、私たちの身体感覚や思考様式を覆っている。こうした状況下では、イメージに対する如上の批判的言説は恣意的なものにならざるを得ない。イメージへの問いを立て直し、それ固有の資格においてイメージの領域を構想してみる必要があるのである。

方法的視座——社会的な場と場所の系

以上のような問題意識から、本研究は、「杜の都」の場所イメージについて、明治期末から現在にいたる変遷を辿りつつ、そこにどのような変容があったのかを社会的に明らかにすることを目的としている。ここで本研究を遂行するうえでの方法論的視座について述べておきたい。本論では、場所のイメージを取り扱うが、アンケート調査を行うわけではない。「杜の都」についての言説を扱いながら、その場所イメージを社会的な場に照準しながら記述していくという立場をとる。ここで社会的な場とは、内田隆三が述べているように、「人びとが自分を取り巻く環境世界のありようを知覚し、理解し、了解するとき用いている文化的な資源ないし技術論から構成されるもの」であり、「環境世界へのかかわりにおいて人びとが用いている知覚の形態、まなざしの構造、思考の様式」である。「場」といっても即座に空間的なものを指すわけではなく、むしろ空間を思考したり、想像したり、現実化したりする際に依って立つ次元を「場」として考えてみるということである。例えば、「杜の都」においては、風景が重要な要素となっているが、過去の風景について取り上げる場合、必ずしも特定の誰かが実際に見た風景の記憶を扱うというだけではなく、そうした風景を見ることを可能にしているまなざしの記憶を問題とすることである。それは、ある時代状況下で開かれた知覚の形態やまなざしの構造の記憶であり、その変容を百年という厚みにおいて捉え、現在において考えてみるということである。

また、本研究は、「杜の都」という記号表現を扱うことになるが、それは、都市の記号論的分析のように、記号的平面に仙台という場所を投影し、その構成要素の相関関係を明らかにすることを意図するものではない。この記号は百年にわたり仙台という場所と相関してきた言葉であり、そこには仙台という場所のイメージが関連してきた。その百年の時間のなかで、「杜の都」のイメージをめぐっていかなる社会的な場が交差し、また変容を遂げてきたのかを明らかにしたいのである。

この点は、人びとの営みや出来事とともに、ある特定の場所に時間を経て縦糸のように連なっている系とでも呼びうるものを浮かび上がらせる試みと言い換えてもいいだろう。場所とは、そうした系が何本も集まってできた束のようなものとして捉えられる。その場合、われわれが場所を体験するということは、それぞれの（あるいは複数の）系に触れながら、出来事を生み出していくことだと言えよう。この出来事と系が、ある場所イメージを係留し、かつ継承する場をなしている。そうした係留場としての系は、人間の営みによって支えられており、そうした営みが反復されているとき、その系は同じ相貌をもって再生産されていく。そこに何らかの変異がもたらされたとき、系に非連続が生じ、場所の様態も変わっていく。偏見やステレオタイプなども含めて場所の共通イメージが不変なものではなく、移り変わっていくのは、そうした系に非連続が生じ、そのイメージを支える場に変容を来したからだと考えられる。

本論では、こうした場所のヴィジョンを「杜の都」の場所イメージの記述に適用している。とくに「杜の都」のイメージに相関する基本的な要素と考えられるものを過去に溯りながら原型を見定め、それらが変化したり、喪失したり、あるいは新たな要素に取って代わられたりするさまを観察することから、場所イメージとその変容が系として記述される。

本論の全体的な構成と内容

このような観点に立ち、「杜の都」の場所イメージの変遷を眺めてみると、そこには大きく四つの時期区分を設けることができると思われる。以下、この時期区分に基づきながら、「杜の都」の変容の大まかな流れを示しつつ、本論の全体的な構成と内容について要約する。

まず第一期は、「森の都」の名が登場した明治末から昭和戦前（戦災を受ける昭和20年）までの期間であり、初期段階が形成された時期にあたる。ここでは、鉄道の敷設と観光旅行の発達により、「森／杜の都」の呼称が生まれる状況が用意される。仙台に観光のまなざしが注がれるようになるなか、観光案内書の記述が積み重ねられていく。案内書の言説群が一定の厚みに達したとき、「森の都」の名が登場することになる。第一章では、この案内書の記述を起点にしながら「杜の都」の名が流布し、他の郷土誌の記述などにも伝播したこと、また、この呼称が定着をみることで、初期の「杜の都」のイメージが構成されていったことについて言及する。なかでも、ここでは、「杜の都」の原型が、観光案内の記述、青葉城址や向山からの国見山型景観／視線の構造、藩政時代からの屋敷林・寺社林の樹木群、都会と田舎の対比という言説的な布置によって、複合的に構成されている点が明らかされる。

だが、この時期、「杜の都」の名は必ずしも仙台に固有のものではなかった。当時、この名で呼ばれた都市は複数見られたようである。第二章では、とくにこの名称との結びつきが強いと思われる金沢、熊本のケースに立ち寄ることとする。ここでは、仙台を含めた三つの都市が、同じ名で呼ばれることを可能にしている社会的な場の広がりや問題にされる。これら三都市は、鉄道網で結ばれながら、旧制高校や師団が置かれ、国家的な制度を共通の場としながら並列していた。また、金沢と熊本の事例から、観光のまなざしが、場所の記述を媒介に土地の起伏や景物、歴史、風土を織り込みながら、地方や郷土の形象を視覚的消費の場へ向けてかたちづくっているあり方が明らかにされる。

また、昭和初に入ると、「杜の都」の名は、郷土をモチーフにした歌曲のなかに登場するようになる。とくに仙台では、昭和初期の新民謡ブームを背景に、昭和11年（1936）、「ミス仙臺」というレコードが流行するが、第三章では、この曲の流行をめぐる、とくにそれを貫いている音の感性のありように照準しながら分析を試みている。ここで注目されるのは、当初は案内書や郷土誌の記述上に登場していた「杜の都」の名が、歌声という聴覚的な経験にその成立の場を拡大しながら、場所の記憶に新たな地層を加えたということ、さらに、場所が観光のまなざしとともに疑似イベントの次元で消費される状況を迎えていたということである。

第二期は、戦災とその後の復興事業から高度成長期にかけての期間で、「杜の都」の転換期にあたる。ここでは、それまでの「杜の都」の景観を構成していた屋敷林・寺社林が焼失する。名だけが残った「杜の都」は、復興事業関係者の内部で復興のスローガンとして掲げられることによって、緑地政策と結びつけられていくのである。第四章では、こうした復興事業の過程で、屋敷林・寺社林の焼失が<緑>の喪失へと象徴的に転換されていく点に注目し、街路樹や緑化に伴う<緑>のイメージが「杜の都」の新たな構成要素となっていくあり方が明らかにされる。また、ここでは、そうした<緑>のイメージに依拠するかたちで、「杜の都」の名が島野革新市政におけるまちづくりのシンボルとして前面に掲げられる点についても言及する。

ここにみられるイメージ上の本質的な変容としては、普遍視線と地べたから仰高する逆世界視線との交わる場所としての<原っぱ>から、普遍視線と世界視線との交わる場所としての<広場>への転換として理解することができる。こうした戦災復興以後の緑化の取り組みは、国土緑化運動の流れと並行しているが、仙台という場所のコンテクストにおいては、「杜の都」をめぐる場所イメージの構成に生じた空隙

を近代的な都市計画の理念で埋めようとするものであったといえよう。それと同時に、戦災の経験によって、「杜の都」の記号表現は——木が多い都市という——その意味的な対応から離れ、復興や健康都市など、仙台市のまちづくりの理念によって新たな意味が与えられるようになる。言い換えれば、戦災を機に、「杜の都」は実現すべき仙台の都市イメージとして再解釈され、志向的对象として捉え返されるようになるのである。とくに昭和48年の「杜の都の環境をつくる条例」制定は、その点を明確化するとともに、「杜の都」の名を仙台市の公式名称として制度化することになった。

この条例の制定以後、「杜の都」の場所イメージは第三期に入る。第三期は、条例に加えて、「青葉城恋唄」の流行（昭和53年）から昭和の終わり頃までの期間である。ここでは、名称が公式化されただけではなく、戦災復興事業で整備された定禅寺通りや青葉通りの街路樹の<緑>の風景が、新たな「杜の都」の象徴として定着している。また、この呼称には、健康都市や環境など、さまざまな意味が詰め込まれていき、新しい「杜の都」の像が描かれていく時期でもある。とくに「青葉城恋唄」の流行は、戦後の「杜の都」を印象づけるとともに、レコードやラジオ、テレビの普及のなかでこの呼称が仙台という場所と結びつけられるようになったという点で重要な契機となった。

第四期は、だいたい平成に入ってから現在までの期間である。ここでは、戦後の「杜の都」にさらに変容の局面が生じつつあり、戦後の「杜の都」を象徴しつつもそこに変化の兆しを示す出来事に焦点が当てられている。第五章では、第三期と第四期にまたがる事象を取り上げ（これは第三期から第四期へは連続的に移行していくためである）、現代における「杜の都」の場所イメージの諸相について言及している。

まず、「青葉城恋唄」を取り上げた第一節では、第三章でみた「ミス仙臺」との比較をおこなっている。戦災の経験を前後に挟んで流行した二つの歌において、「杜の都」のイメージをめぐっていかなる相異が見られるのかが明らかにされる。とくに注目されるのは、「ミス仙臺」に比べ、「青葉城恋唄」は「杜の都」のイメージが拡張している点である。かつては場所の一部——木が多い都市——を表象する一片の記号表現であった「杜の都」が、「青葉城恋唄」では仙台を代理／表象するものとして位置づけられるようになっていたのである。

平成元年に起こった青葉通りの地下駐輪場設置に伴うケヤキ撤去問題を取り上げた第二節では、戦後の「杜の都」の象徴であるケヤキ街路樹をめぐって変化の兆しが生じつつあることが問題とされている。ケヤキ撤去をめぐる市側と反対市民側との論争では、戦災以後定着してきた「杜の都」の街路樹の景観が、習俗の位相を仄めかしながらも、概ね<緑>／<広場>としてのイメージを共通の場にして論議されていた。ここには樹木と<緑>イメージの関係が、後者の優位として進んでいく傾向が観て取れる。

第三節で取り上げた観光シティバス「るーぷる仙台」は、「杜の都」の場所イメージの第四期において、新たにみられる事象として注目したものである。ここでは視線の構造が都市内部を移動し、そのイメージは車窓の風景として体験される。またその主体は、市民というよりもツーリストであり、「杜の都」を貫く観光のまなざしは、その視覚的消費の度合いを増している。

このように、現在の「杜の都」の場所イメージは、かつての初期段階から大きく変容してきた。とくに屋敷林・寺社林の景観は、街路樹や緑地へと転換し、それにとまなう<緑>のイメージが、場所と「杜の都」の名を媒介している。こうした一連の考察を踏まえ、終章では、「杜の都」のイメージの変容について総括する。とくに、都市空間の変容、まなざしの変遷、公式名称化の影響に関わらせながら、「杜の都」のイメージをめぐる現在とその展望について論じる。

総括——「杜の都」の変容と現在

終章では、これまでの考察を総括し、「杜の都」の場所イメージにおける変容について三点にわたって述べている。

まず第一に、「杜の都」の風景における視線のありようが大きく変わったことが挙げられる。初期段階の「杜の都」の風景は、国見山型景観とその視線に固定されて眺められていた。ところが、戦災を機に、視線は動きを見せるようになる。昭和40年以降のビル開発・高層化によって、市街を覆うような樹々の生い茂る風景を得ることは物理的に不可能になっていく。と同時に、この頃になると、植樹当初は幼木だったケヤキが大きく成長し、壮麗な景観を呈するようになっており、「杜の都」の風景はこちらへシフトしていく。つまり、景観の構造は、国見山型の視線から解放されて多角化し、定禅寺通り・青葉通りのケヤキ並木や広瀬川一帯の緑地帯などを軸に、街並みの景観へと転換していくのである。この戦災復興期から現在までの「杜の都」の風景では、視線はかつてのように一点に固定されておらず、ケヤキ並木を焦点にしつつも、複数の視点から風景を多面的に切り取ることが可能になっている。そこでは、風景の視線が、国見の山から街へ降りて、「杜の都」を都市の内部空間から捉え始める。この段階における「杜の都」の風景は、都市空間の内部を錯綜する複数のまなざしの集積として捉えることができるだろう。

さらに現在では、いくぶん特殊な例ではあるが、第五章で取り上げた「るーぶる仙台」における景観演出のように、視線の錯綜状態を特定のかたちに再構成し、しかも移動する視線として提示するという状況が新しく立ち現れている。このように、「杜の都」の風景をめぐって、一点の固定的視点から、多角化・複数化を経て、再編および移動の視線へというまなざしの変遷と展開を見てことができよう。また、「るーぶる仙台」のように、これには自動車空間としての仙台の再構築も関わっていた。

第二に、「杜の都」の構成の基盤となっていた都市空間の変容が挙げられる。「杜の都」は、明治期の鉄道の敷設とそれに伴う旅行の発達を背景に生まれ、またそうした状況を基盤にしながら場所イメージの初期段階を構成していた。そこでの都市空間の形成原理と今日のそれとを比べてみると、大きな質的な変容が生じている。とくに大きい変化が鉄道空間から自動車空間への転換である。戦後も国土開発においては鉄道が中軸であったが、新幹線および高速自動車道の整備が一応の完成をみると、自動車道路網が経済効率という点で鉄道よりも優位になる。この空間の質的な相異について、藤森照信は線と面との対比から説明している。「鉄道というのはあくまで点と点を結ぶ線で、その線をさらに線とつないでも面にはなりません。いわば鉄道は骨格です。それに対して道路というのは血管的なのです。主要血管としての幹線道路から小さな血管である地方道がどんどん枝分かれして行って、毛細血管のようにどんなところでもつながる。極端に言えば、野中の一軒家までつないでしまうのです。ですから、道路は面を支配できます。支配する力が末の末までずっと染みていくのです」。藤森は、交通・輸送体系の変化を、(1)江戸時代の水上交通から、(2)明治・昭和中期・後期の鉄道を中心とした陸上交通へ、さらに(3)昭和後期・末期の自動車交通へという時期区分で示している。これに従うなら、「杜の都」の場所イメージの変遷は、都市の交通空間の(2)から(3)への移行に重なっている。仙台の都市空間の場合、こうした自動車空間へのシフトを示す象徴的な出来事としては、昭和51年(1976)の市電廃止が挙げられるだろう。

このように、「杜の都」の場所イメージの初期段階は、鉄道および駅を中心とした都市空間の編成を深く刻印していた。一方、戦災復興以降の「杜の都」が成立する場合は、モータリゼーションの進展によってもたらされた、自動車が構成する面的な移動の空間である。この空間を現在の「るーぶる仙台」が走行しているのである。

第三に、「杜の都」の名が仙台市の公式名称となったことの影響も大きい。仙台市は明治22年(1889)の市制施行以来たびたび合併を繰り返している。だが、初期の段階では、国見山型の視線が保たれていた

ため、「杜の都」の景観の範囲は、青葉城址や向山から眺められる市街地を中心とした一帯にとどまっていた。また、戦後、国見山型景観から風景の視線が多角化しても、この時点ではまだ、青葉通り・定禅寺通りの街路樹や広瀬川の畔などが風景の中心であり、中心市街の景観であることは担保されていた。

ところが、「杜の都」の呼称が、昭和48年（1973）の「杜の都の環境をつくる条例」制定を機に公式名称となることで、この名は、市域全体との対応関係をもつようになる。とくに仙台市は平成元年（1989）に政令指定都市に昇格するが、その過程で、仙台市は、1980年代後半から周辺市町を相次いで編入してきた。現在の市域は、かつての国見山型景観の範囲を大きくスケールアウトしている。今日の公式名称としての「杜の都」は、この広漠とした市域の統合的シンボルとしての役割を担うようになっているのである。

これに伴い、「杜の都」の名は、風景／視線との結びつきから分離して運用されることになる。これを改めて視線の問題として捉え返すなら、普遍視線を排除し、世界視線からのみ眺めた都市像といえる。この場合、「杜の都」のイメージは、街路樹からも離れ、緑被率（市域面積に占める緑地面積の割合）のように、抽象的なレベルで結像するほかない。仙台市が「杜の都」の名を掲げ、またそこに緑化／＜緑＞のイメージを重ねていくかぎりには、「杜の都」の場所イメージには、こうした抽象性がつきまとうことになるだろう。

こうした帰結として、「杜の都」のイメージは、それまでこの名で呼ばれることのなかった地域にまで適用されるようになり、一方では、ケヤキ並木の景観や青葉山、広瀬川流域の緑地帯の風景を残しつつも、他方では、拡散しながら像を結びづらくしているように見える。初期段階と対比してみると、今日の「杜の都」の風景は、特定の視線によって全体的に把握できるような対象ではなくなっている。それゆえ、ステレオタイプとしての景観と、それ以外の市域内のあらゆる場所との間で、ある意味での両極化が生じている。テレビ、観光ガイド、インターネットなどの、メディア上では、そうした両極化の溝を映像演出の技巧によって埋めることができるだろう。しかしこのことは、仙台市の統合的イメージとしての「杜の都」が、むしろ情報メディアを本質的な成立の場にするという事態を示唆している。こちらを基準にするならば、地理的現実もまた、身体とメディアによって構成される抽象の一つとして捉え直す必要が生じてくるだろう。いずれにせよ、現在の「杜の都」の場所イメージは、情報メディアに依拠する比重がきわめて高くなっているのである。観光ガイド、タウン情報誌、新聞、広告、テレビ、そしてインターネット等、至るところで、仙台に関連するものには「杜の都」の名が用いられている。それとともに、「杜の都」の映像は、かつての観光案内書では写真が限度だったが、今日のテレビやインターネットでは多様な映像とともに提示可能になっている。「杜の都」の初期的構成が、観光のまなざしの発達によって場所を記号的に開いていく局面において生じたのに比べると、現在、「杜の都」をめぐる状況は、情報技術の発達とともに場所を映像的に開いていく段階を迎えている。それが向かう先は、グローバルな映像のフローの空間であり、そこではハーヴェイが述べていたように、場所間の差異をめぐる競争が展開している。それを新たな場として、「杜の都」の場所イメージが構成されるとすれば、それはいかなるものなのか。今後の展開が注目される。

論文審査結果の要旨

本論文は、今日いわゆる「杜の都・仙台」として呼称されているものを、場所に関する一つの言説として取り上げ、その変遷を場所とイメージという二つの問題系の交差する平面において描述することに

よって、明治以降の近代都市空間の経験の意味を浮かび上がらせようとするものである。併せて、都市構造や機能に準拠点をもとめてきた従来の支配的な都市社会学や記号的平面に都市を投影し、その構成要素の相関関係の解明に力点を置く一部の都市記号論に見られる分析の欠落部分を埋めようとするものである。

本論文は、序章と終章を含む全八章と、浩瀚な資料編から成る。まず序章では、本論文を通底する課題意識と方法的視座が、H・ルフェーヴルの「空間の生産」論とR・シールズの社会空間化論の解説を介して示される。そして筆者の主張する「場所の社会学」の概念枠組みがシカゴ学派都市社会学やロン・バルトに嚮導されてきた都市記号論の概念枠組みを向こうにおいて提示され、それに依拠して、「杜の都」の場所イメージの変容が四つの時期区分によって明らかにされることが言述される。本論文の基幹をなす部分である。

鉄道の敷設と観光旅行の発達によって、「森／杜の都」の呼称が生まれてくる第一期の初発段階に照準を据えた第1章では、「杜の都」の原型が複合的な言説の布置構成としてあることが明らかにされる。すなわち観光案内の記述、国見山型景観／視線の構造、藩政時代からの屋敷林・寺社林等の風景、都会と田舎のディコトミーといったものの多重的な構成としてあることが記述されている。そしてとりわけ観光のまなざしの発達が仙台における「杜の都」の登場、およびその場所イメージの初期段階においてきわめて重要な役割を果たしたことが指摘されている。しかし、「杜の都」の名称は必ずしも仙台に固有のものではなかった。

そこで第二章では、視野を金沢、熊本にまで拡げて、三つの都市が同じ「杜の都」と呼ばれることを可能にしている社会的な場の広がり言及される。まず注目されるのが、三つの都市が共通して鉄道網で結ばれ、旧制高校や師団が置かれているといった国家的な制度を共通の場としていたという点である。つまり「学都」とか「軍都」の成立平面に光があてられるのである。次に、そうした三都市の機能的な条件の共通性を確認した上で、観光のまなざしが場所の記述を介して土地の起伏、景物、歴史、風土のあり様を射程に入れながら、地方とか郷土の形象を視覚的消費の場へと組み入れることによって、国民的統合に共振してきたことが指摘される。そして最後に、「郷土」や「故郷」の意味が再審に付されている。

第四章は、この第二期、すなわち「杜の都」の転換期である、戦災とそれに続く復興事業から高度成長期の期間を考察の対象に据えている。そこでは復興事業のプロセスで焼失した屋敷林・寺社林が＜緑＞の喪失へと意味転化されていくなかで、緑地政策の要である街路樹や緑化の進展とともに＜緑＞のイメージが増幅され、「杜の都」の新たな構成要素となっていく状況が浮き彫りにされる。そして戦後の仙台市政の一時期を画した島野革新市政において、「杜の都」がまちづくりのシンボルとして登場してくる成立の位相が明らかにされる。このようにして本章では、「杜の都」の記号表現／場所イメージが戦災→復興事業→まちづくりの進展とともに、いわば木が多いというような意味的な相即関係から切り離されて、まちづくりの理念の基礎をなすもの、換言するなら実現すべき都市イメージの基底をなすものとしてとらえ返されるようになったことが強調されるのである。昭和48年の「杜の都の環境をつくる条例」制定は、こうした「杜の都」の再解釈、および志向の対象としての再定位の到達点に位置づけられている。

第五章では、上記の条例制定にはじまって「青葉城恋唄」の流行をはさんで昭和の終わりを迎える第三期、およびそれ以降の平成に入ってから現在に至るまでの第四期、が直接視野におさめられている。まず第三期の特徴として、第二期での＜緑＞のイメージが「杜の都」の象徴として定着するとともに、さまざまな意味が込められていくなかで、新しい「杜の都」の像が描かれていくことが指摘される。そしてとりわけ「青葉城恋唄」が「杜の都」のイメージの拡大に貢献し、仙台を代理／表象するものとなっ

たことが「ミス仙臺」との比較において明らかにされている。次に第四期の特徴として、平成元年に生じた青葉通り地下駐輪場設置に伴うケヤキ撤去問題、そして「るーぷる仙台」の運行を対象事例にして、〈緑〉のイメージが「普遍視線と世界視線との交わる場所」としての〈広場〉の内実を獲得しつつあること、また「杜の都」を通底する観光のまなざしがいつそう視覚的消費の度合いを増していることが述べられている。

さて終章では、以上の展開を踏まえて、「杜の都」の場所イメージの変容の鍵をなすものとして、以下の三点が指摘されている。一つは「杜の都」の風景への視線が一点に固定されたものから、ケヤキ並木を軸線に据えながらも多面的／多相的にとらえる方向に変わってきているという点である。つまり青葉城址や向山からの視線／国見山型景観の構造が後景にしりぞき、都市の内部空間から複数のまなざしがせめぎあいながら「杜の都」の風景をとらえ返すような視座構造が前景に立ちあらわれていることである。また一つは、「杜の都」の場所イメージの変容の基底をなすものとして、都市空間のダイナミックな地殻変動に目が向けられている。ここではその変容を象徴的に示すものとして鉄道空間から自動車空間への転換がとりあげられている。そしていま一つは、「杜の都」の名称が風景／視線との直接的な結びつきから離れる一方で、抽象的な市域の統合的なシンボルとしての機能をいつそうになうようになっていく点である。結局、本論文においては、「杜の都」の風景がもはや特定の視線によって全体的に把握できるようなものではなくなっていること、しかしにもかかわらず「杜の都」のイメージが抽象的な像を結びつつあることに「杜の都」の〈現在性〉を観取しているのである。

今日、都市構造や機能に準拠点をもとめてきた社会学的研究のリアリティの不在が取りざたされている。本論文はこうした現状を見据え、かつ対極にあるとされてきた一部の都市記号論のあり様をも視野におさめて、「場所」と「イメージ」に関する先行研究の理論的整序と対象に関する膨大な文献や資料の博搜の上に立論をこころみたものである。本論文がめざしている「場所の社会学」は斯界においても未開拓の分野であるだけに、その定立に際しては方法論的に多くの検討を要することはいうまでもない。しかしそうした困難な状況のなかで、本論文はさまざまな資料を駆使しながらそうした方法論的検討のための課題の析出に成功している。また本論文が、結果的に近代の都市空間が有する多義性に光をあてていることも評価される。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。